

芽吹き屋 presents

第 10 回盛岡市アイスリンクメモリアルカップ女子の部総括

1. 本総括の目的

芽吹き屋 presents 第 10 回盛岡市アイスリンクメモリアルカップ女子の部は、2026 年 7 月 25 日・26 日の 2 日間にわたり、みちのくコカ・コーラボトリングリンク（盛岡市アイスリンク）において開催され、全日程を終了した。

本資料は、女子の部の開催結果、参加選手を対象に実施した MIP 投票及び大会アンケートの結果、情報発信の実績並びに運営上の成果と課題を整理し、来年度以降の大会運営改善につなげることを目的とするものである。

アンケートは、出場選手 26 名を対象に、1 人 1 回の回答として実施した。回答数は 23 件、回答率は 88.5%であり、全 6 チームから回答が得られた。なお、大会日程、開催時期等に関する一部の設問では複数回答を認めている。また、自由記載の意見は、必ずしも参加選手全体の合意を示すものではないが、運営上の合理性が認められる意見については、来年度以降の検討事項として整理した。

本総括は、先に作成した男子の部総括と基本的な構成を合わせ、今後、男子の部・女子の部を横断した大会全体総括を作成する際の基礎資料としても活用することを想定している。

2. 女子の部再開の意義及び本大会の位置付け

盛岡市アイスリンクメモリアルカップ女子の部は、第 6 回大会以降、必要な参加チーム数に達しないことなどから、開催を見送ってきた。第 10 回大会では、6 チームから参加を得ることができ、第 5 回大会以来、5 大会ぶりに女子の部を再開することができた。最終的には、ワールドカーリングツアーのポイント付与対象大会として必要な 8 チームには達しなかったものの、参加チームの理解と協力を得て、6 チームによる 8 エンド・総当たり戦として大会を成立させることができた。

女子カーリングを取り巻く大会日程の過密化、遠征費や参加費の負担、チーム編成の流動性等を考慮すれば、長期間開催できていなかった女子の部に6チームが参加し、全日程を完遂できたこと自体に意義がある。

一方、今後の大会設計を考える上では、8チーム開催を実現することが重要である。8チーム開催が実現すれば、ワールドカーリングツアーのポイント付与対象大会として成立する可能性が高まるだけでなく、6チームによる総当たり戦とは異なる競技方式を採用できる。予選ブロック、決勝トーナメント、順位決定戦等を組み合わせることで、各チームの試合間隔に一定の余裕を持たせ、参加選手の身体的負担、レセプション前後の日程及び競技運営上の負担を軽減できる可能性がある。しかしながら、8チームによる競技方式では、予選結果や決勝トーナメントへの進出状況によって、一部のチームの試合数が、今回の6チーム総当たり戦における5試合より少なくなる可能性がある。したがって、8チーム開催は、単なる参加チーム数の増加ではなく、競技的価値、試合間隔及び競技機会のバランスを考慮して設計すべきものである。

本大会は、単に試合を行うだけではなく、次の要素を一体として提供する、オールインクルーシブ型の競技大会として設計している。

- ・ 8 エンドによる競技機会
- ・ 賞金及び表彰
- ・ 昼食
- ・ 開会式及びレセプション
- ・ 参加チーム間の交流
- ・ ライブ配信
- ・ 公式記録の作成及び公開
- ・ SNS・ホームページによる情報発信
- ・ 保険及び記念品等

女子の部においても、競技と交流を一体として提供する現在の大会設計について、参加選手から高い評価を得ることができたと考えられる。

3. 開催結果

今大会の女子の部は、6チームによる総当たり戦として実施し、全15試合を行った。最終順位は、次のとおりである。

優勝 東京 NB
準優勝 チーム柏木
第 3 位 アクレージュ宮城
第 4 位 チーム中村
第 5 位 アルファベッツ
第 6 位 メローはたはた

東京 NB は 5 戦全勝、勝ち点 15 で優勝した。

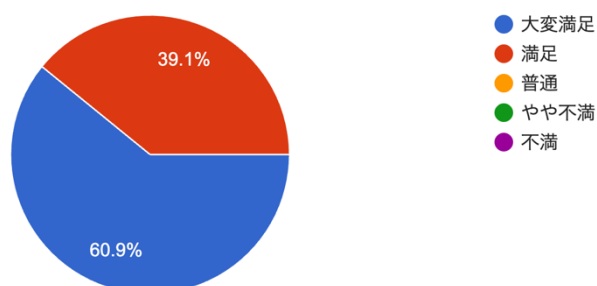
チーム柏木とアクレージュ宮城は、ともに 3 勝 2 敗、勝ち点 9 で並んだが、直接対戦でチーム柏木が勝利していたことから、チーム柏木が準優勝、アクレージュ宮城が第 3 位となった。第 7 ラウンド終了時点まで上位順位が確定せず、最終第 8 ラウンドの結果によって最終順位が決まる展開となった。総当たり戦として、大会最終盤まで競技的な緊張感と大会への関心を維持することができた。

4. アンケート結果の概要

4-1. 大会全体の満足度

大会全体の満足度については、次のとおりであった。

- ・ 大変満足 14 件
- ・ 満足 9 件



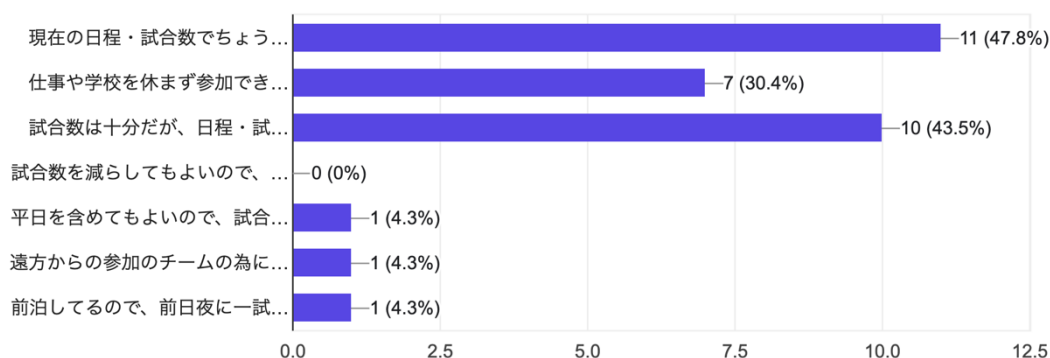
回答者 23 名全員が「大変満足」又は「満足」と回答しており、肯定的評価は 100%であった。アンケート自体の回答率も 88.5%であり、大半の出場選手

の評価を把握できた点は、今回の結果の大きな特徴である。女子の部全体として、参加選手から高い満足度が得られたものと評価できる。特に、5大会ぶりの開催でありながら、大会全体に対する否定的な回答がなかったことは、大きな成果である。

4-2. 大会日程及び試合数に関する評価

大会日程及び試合数については、複数回答を含め、主に次の回答が得られた。

- 現在の日程・試合数でちょうどよい 11 件
- 試合数は十分だが、日程・試合間隔はややタイトに感じた 10 件
- 仕事や学校を休まず参加できる現在の形式を維持してほしい 7 件



現在の日程・試合数を肯定する回答と、日程・試合間隔に負担感があるとする回答は、ほぼ拮抗していた。この結果については、今回の参加チーム数及び競技方式との関係を踏まえて評価する必要がある。今大会は6チームによる総当たり戦であり、各チームが2日間で5試合を行った。このため、各チームの試合間隔を十分に確保することが難しく、日程の密度が高くなった。一方、本大会が目標としている8チーム開催が実現した場合には、総当たり戦ではなく、予選ブロック、決勝トーナメント、順位決定戦等を組み合わせた競技方式を採用できる。これにより、各チームの試合間隔に一定の余裕を持たせ、選手の身体的負担やレセプション前後の日程を改善できる可能性がある。ただし、競技方式によっては、予選結果や決勝トーナメントへの進出状況により、一部

のチームの試合数が今回の5試合より少なくなる可能性がある。したがって、今回のアンケートで示された日程・試合間隔への負担感を、単に試合数を減らすべきとの結論に結び付けることは適当ではない。今後は、次の点を一体的に検討する必要がある。

- ・ 8チーム開催を実現すること
- ・ 8チームに適した競技方式を採用すること
- ・ 各チームの試合間隔を確保すること
- ・ 各チームに可能な限り十分な試合数を保障すること
- ・ 順位決定戦又はコンソレーションゲームを設定すること
- ・ レセプション前後の選手負担を軽減すること
- ・ 大会終了時刻が過度に遅くならないようにすること

自由記載では、次の意見もあった。

- ・ 前泊するチームが多いことを考慮し、金曜夜に1試合を実施してもよいのではないか
- ・ 平日を含めてもよいので、試合数や大会規模を確保してほしい
- ・ 遠方から参加するチームの移動に配慮した日程としてほしい

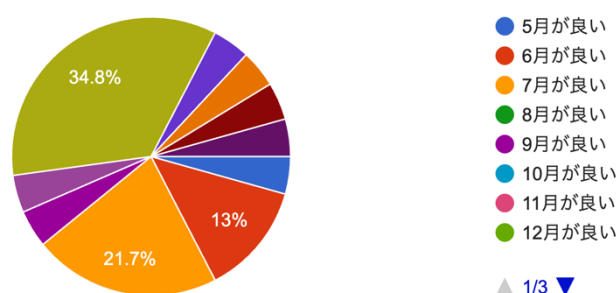
金曜夜の試合設定は、6チーム又は7チームで開催する場合の日程分散策として検討の余地がある。一方、8チーム開催が実現すれば、競技方式の変更にによって、週末2日間の中でも試合間隔を改善できる可能性がある。したがって、来年度以降は、まず8チーム開催を目指し、その上で最低試合数、試合間隔、順位決定方法及びレセプションとの接続を含め、競技方式を慎重に設計することが適当である。

4-3. 開催時期に関する意向

開催時期については、主に次の回答が得られた。

- ・ 仕事・学校に影響しにくい週末開催であれば、時期にはこだわらない
7件
- ・ 7月が良い 5件
- ・ 6月が良い 3件
- ・ 7月又は8月頃が良い 1件
- ・ 5月が良い 1件
- ・ 9月が良い 1件

- 3月が良い 1件
- 10月から日本選手権終了までの期間以外であれば、時期にはこだわらない 1件
- 他の時期との比較ができない 1件



特定の開催月について、明確な合意は得られなかった。この結果から、開催月そのものよりも、仕事や学校を休まず参加できる週末開催であることや、他大会と重複しないことが重視されていると考えられる。自由記載では、次の意見があった。

- 6月、7月で男女の開催順序を隔年にすることを検討してほしい。
- 7月は東北ミックスダブルス大会やその予選と重なることが多く、参加しにくい。

明示的にこの案を挙げた回答は1件であるが、その内容は運営上の合理性を有し、考慮に値する。男子の部を毎年6月、女子の部を毎年7月に固定した場合、7月に開催される他大会との重複による影響を、女子の部が継続的に受ける可能性がある。5月末から7月までの期間における男子の部・女子の部の開催順を、隔年で入れ替えることには、次の利点が考えられる。

- 特定の部門だけが、毎年同じ時期の不利益を受けることを避けられる
- 男女両部門の参加機会を、より公平に確保できる
- 6月と7月のどちらが参加チームを確保しやすいかを比較できる
- 他大会との重複がエントリー数に及ぼす影響を検証できる
- 男子・女子それぞれの時期別の参加傾向を把握できる

一方、日本選手権、ワールドカーリングツアー・ジャパン、東北ミックスダブルス大会、地域大会、施設のアイスマンテナンス及び会場確保の状況は、毎年度変動する。したがって、機械的に毎年入れ替えるのではなく、

男子の部・女子の部の開催月を固定せず、5月末から7月までの期間における両部門の開催順を、原則として隔年で入れ替えることを検討する。ただし、国内外及び地域の大会日程、会場確保、氷の状態、参加見込み等を踏まえ、毎年度柔軟に決定する。

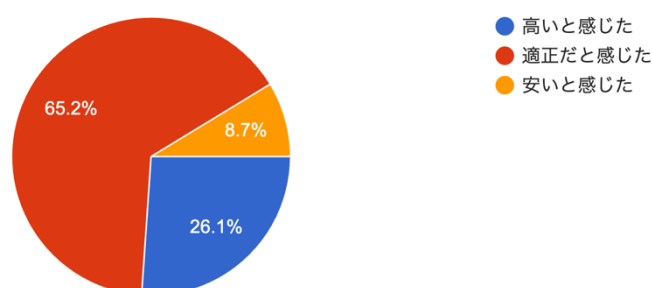
という考え方が適当である。

開催時期の柔軟化は、男女両部門において8チームを確保する可能性を高める観点からも重要である。

4-4. 参加費に関する評価

参加費については、次のとおりであった。

- ・ 適正だと感じた 15 件
- ・ 高いと感じた 6 件
- ・ 安いと感じた 2 件



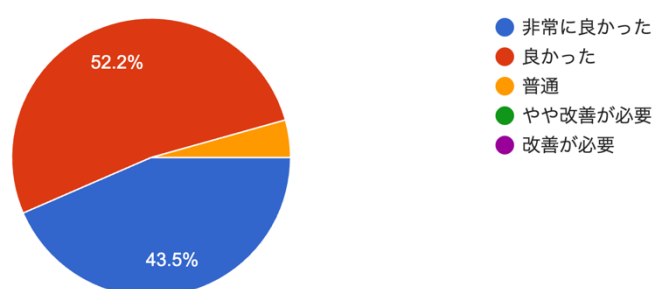
「適正」との回答が過半数を占めており、大会内容と参加費のバランスについて、一定の理解が得られたものと考えられる。一方、23 名中 6 名、26.1%が「高い」と回答しており、参加費に対する負担感が存在することも明確である。本大会は、競技参加のみを対象とするものではなく、レセプション、昼食、賞金、記録管理、ライブ配信、表彰、保険、記念品及び参加者間の交流等

を含めた大会である。この大会設計は、参加選手の満足度から一定程度受け入れられていると考えられる。8チーム開催時には、参加費収入が増加する一方、参加人数に応じて食事、レセプション、保険、記念品等の費用も増加する。したがって、8チーム開催によって直ちに参加費を引き下げられると考えるのではなく、6チーム、7チーム及び8チーム開催時の収支をそれぞれ試算し、参加費負担の軽減可能性を検証する必要がある。現行の大会内容を維持しながら参加費負担を軽減するためには、地元企業・商店等からの協賛金・支援金を拡充することが重要である。

4-5. 会場・氷の状態・競技環境に関する評価

会場・氷の状態・競技環境については、次のとおりであった。

- ・ 非常に良かった 10 件
- ・ 良かった 12 件
- ・ 普通 1 件

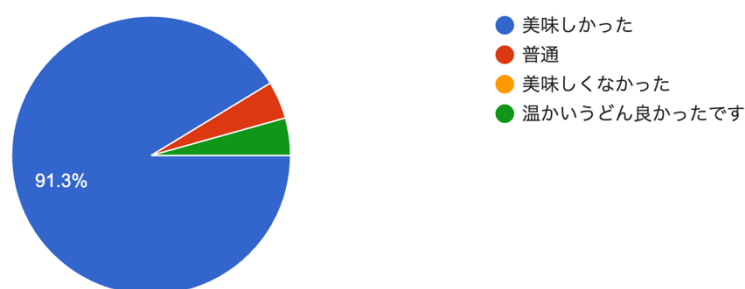


「非常に良かった」及び「良かった」を合わせると 22 件、95.7%であり、競技環境について非常に高い評価が得られた。盛岡市アイスリンクのカーリング専用シート、アイスメイク及び競技進行は、本大会の競技的価値を構成する重要な要素である。今後も、各ラウンドにおける氷の変化、競技開始時刻及びアイスメイクの間隔等を検証し、現在の競技環境を維持・向上させる必要がある。8チーム開催時には、競技方式とアイスメイクのタイミングを一体的に検討し、各チームの試合間隔と競技環境の双方を確保することが重要である。

4-6. 料理・弁当に関する評価

料理・弁当については、次のとおりであった。

- 美味しかった 21 件
- 温かいうどんが良かった 1 件
- 普通 1 件

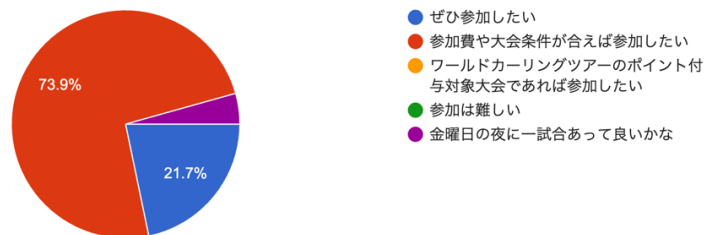


実質的に 22 名から肯定的な評価が得られた。大会期間中の昼食、開会式・レセプションの料理及び盛岡らしい食文化を取り入れた交流企画は、本大会の大きな強みである。参加選手から料理や交流企画に高い評価が得られたことは、本大会が単なる競技会ではなく、盛岡に来ること自体に価値を感じてもらえる大会として機能していることを示している。

4-7. 来年度の参加意向

来年度の参加意向については、次のとおりであった。

- 参加費や大会条件が合えば参加したい 17 件
- ぜひ参加したい 5 件
- 金曜夜に 1 試合を設定することを参加条件として挙げた回答 1 件



参加に否定的な回答はなく、回答者全員が、条件付きも含めて来年度の参加に前向きであった。一方、「ぜひ参加したい」よりも、「参加費や大会条件が合えば参加したい」とする回答が圧倒的に多い。再参加を確実にし、8チーム開催につなげるためには、次の情報をできるだけ早期に示すことが重要である。

- ・ 開催日程
- ・ 男子・女子の開催月及び開催順
- ・ 募集チーム数
- ・ 参加チーム数別の競技方式
- ・ 8チーム開催時の最低試合数
- ・ 参加費
- ・ レセプションの有無及び内容
- ・ 賞金
- ・ WCT ポイント付与対象大会となる見込み
- ・ キャンセル時の取扱い

特に、8チーム開催によってWCT ポイント付与対象大会として成立する可能性が高まること、試合間隔を確保しやすくなること、競技方式によっては試合数に差が生じる可能性があることを、募集時に分かりやすく説明する必要がある。

5. MIP 賞

参加選手による投票の結果、MIP 賞は、アクレージュ宮城の三浦綾乃選手が受賞した。投票総数 23 票のうち、三浦選手は 12 票、52.2%を獲得した。得票結果は、次のとおりであった。

- 三浦綾乃選手 12 票
- 大久津真由美選手 4 票
- 土屋美喜子選手 2 票
- 柏木由美子選手 1 票
- 弓削比紗英選手 1 票
- 後藤亜季選手 1 票
- 川平操子選手 1 票
- 鈴木夏子選手 1 票

三浦選手は、所属するアクリージュ宮城以外の 5 チームすべてから得票した。主な推薦理由は、レセプションで開催したチーム対抗ミニわんこそば大会において 58 杯を記録して優勝したこと、笑顔や明るい雰囲気では会場を盛り上げたことなどである。競技上の活躍だけでなく、大会全体を盛り上げ、参加者間の交流に貢献した選手を参加選手自身が評価するという、MIP 賞の趣旨に合致する結果であった。

6. レセプション及び交流企画

今大会では、競技初日の夜に、東家別館において開会式及びレセプションを開催した。レセプションでは、各チームの代表選手によるチーム対抗ミニわんこそば大会を実施した。優勝は 58 杯を記録したアクリージュ宮城の三浦綾乃選手、準優勝は 56 杯を記録したチーム柏木の柏木由美子選手であった。この企画は会場を大いに盛り上げ、競技とは異なる形でチーム間の交流を促進した。MIP 投票でも、三浦選手のわんこそば大会での活躍を評価する票が多数を占めたことから、交流企画が参加選手の記憶に強く残ったことが確認できる。本大会におけるレセプションは、単なる付随行事ではなく、参加チーム、スポンサー、実行委員会及び地元関係者をつなぐ重要な大会構成要素である。8 チーム開催時には、競技方式によって試合間隔を確保し、レセプション前後の選手負担を軽減することも重要である。来年度以降も、参加選手の負担、開催時間、会場費等とのバランスを取りながら、盛岡らしさを体験できる交流機会を維持することが望ましい。

7. ビクトリアカーリングクラブとの交流及び優勝特典

本大会の優勝チームには、盛岡カーリングクラブと提携関係にあるカナダ・ビクトリアカーリングクラブが主催する「ISLAND SHOOTOUT」への参加権を付与している。女子の部優勝チームである東京 NB も、同大会への参加権を有す

る。東京 NB については、現時点では参加意向を確認中である。本大会の優勝が、国内大会の成績にとどまらず、海外での競技及び交流の機会につながることは、本大会の競技的価値を高める重要な要素である。

8. 情報発信の実績

今大会では、公式ホームページ、公式 X（旧 Twitter）、公式 Facebook 及び YouTube ライブ配信を組み合わせ、参加チーム、競技日程、途中経過、試合結果、写真、レセプション、スポンサー及び表彰等について継続的に情報発信を行った。各媒体は、次のような役割を果たした。

- X 及び Facebook：速報、写真、話題の提供及びホームページ・YouTube への誘導
- 公式ホームページ：正式な大会情報及び公式記録の集約
- YouTube：会場外から試合を視聴する手段の提供

8-1. 公式ホームページ

大会期間を含む過去 7 日間の公式ホームページの実績は、次のとおりであった。

- ページが閲覧された回数 1,069 回
- ホームページを訪れた利用者 486 人
- 女子の部ページの閲覧回数 520 回

女子の部ページは、期間中、公式ホームページ内で最も多く閲覧されたページであった。

主な流入元は、次のとおりであった。

- X から 308 回
- 検索エンジンから 160 回
- Facebook から 120 回

この結果から、X や Facebook で大会情報に接した人が、詳しい大会情報や公式記録を確認するためにホームページを訪れるという流れが形成されていたものと考えられる。

8-2. 公式 X（旧 Twitter）

公式 X では、大会前から大会期間中にかけて、参加チーム、競技日程、ライブ配信、試合経過、レセプション、スポンサー及び最終結果等を発信した。2026 年 7 月 28 日時点で確認できた主な投稿の実績は、次のとおりであった。

- ・ ビクトリアカーリングクラブ、盛岡カーリングクラブ及び芽吹き屋のバナーを紹介した投稿
約 11 万 7,000 回表示
- ・ 大会最終結果を掲載した投稿
約 7 万回表示
- ・ チーム対抗ミニわんこそば大会を紹介した投稿
約 3,900 回表示、29 件の「いいね」

スポンサー及び姉妹クラブを紹介した投稿が約 11 万 7,000 回、大会最終結果が約 7 万回表示されたことは、大会情報が参加選手や大会関係者の範囲を超えて広く表示される機会を得たことを示している。スポンサー及び関係団体の名称・バナーを掲載した投稿が多く表示されたことから、X による情報発信は、スポンサー及び関係団体の露出機会の拡大にも寄与したものと考えられる。また、ミニわんこそば大会の投稿は、表示回数自体は他の投稿より少なかったものの、「いいね」が多く、競技結果だけではなく、参加者の表情や盛岡らしい交流企画を伝える投稿が、利用者の能動的な反応を得やすいことがうかがわれる。

8-3. 公式 Facebook

2026 年 7 月 18 日から 27 日までの公式 Facebook の実績は、次のとおりであった。

- ・ ページ及び投稿が閲覧された回数 6,122 回
- ・ 投稿へのリアクション、コメント、シェア、クリック等 564 件

6,122 回という数値は、ページや投稿が閲覧された規模を示し、564 件という数値は、投稿を見た利用者が何らかの反応や行動を取ったことを示している。単に情報が表示されただけでなく、一定数の利用者が投稿内容に関心を持ったことがうかがわれる。

8-4. YouTube ライブ配信

今大会では、メインチャンネルとサブチャンネルの2系統を使用し、両シートの試合をライブ配信した。YouTube Studio で確認された、開催時期を含む過去28日間の参考値は、次のとおりである。

メインチャンネル

- 動画が再生された回数 1,600 回
- 動画のサムネイルが YouTube 上に表示された回数 約 2 万 7,000 回

サブチャンネル

- 動画が再生された回数 569 回

YouTube 上で「インプレッション」と表示される数値は、動画そのものが再生された回数ではなく、動画の表紙に当たるサムネイルが、YouTube のトップページや関連動画等に表示された回数である。したがって、約 2 万 7,000 回という数値は、動画が 2 万 7,000 回再生されたことを意味するものではなく、YouTube 利用者に動画を発見してもらう機会が約 2 万 7,000 回あったことを示している。実際の再生回数は 1,600 回であった。

8-5. 情報発信全体の評価

公式ホームページ、X、Facebook 及び YouTube を組み合わせた情報発信は、次の点で一定の効果があつたものと評価できる。

- 大会の可視化
- 公式記録及び試合結果の公開
- 参加選手、家族及び関係者への情報提供
- スポンサー及び姉妹クラブの露出機会の確保
- 大会認知の拡大
- 盛岡らしい交流企画の発信

9. 今大会の成果

今大会の成果として、次の点が挙げられる。

- ① 5大会ぶりに女子の部を再開し、6チームによる総当たり戦として全15試合を完遂できたこと。
- ② 最終ラウンドまで上位順位が確定しない競技展開となり、総当たり戦として質の高い大会を実施できたこと。
- ③ アンケート回答率が88.5%であり、大半の出場選手から大会に関する評価を得られたこと。
- ④ 回答者全員から、大会全体について「大変満足」又は「満足」との評価が得られたこと。
- ⑤ 会場・氷・競技環境、料理・弁当及びレセプション等について高い評価が得られたこと。
- ⑥ ミニわんこそば大会等を通じ、チームや世代を超えた交流を生み出すことができたこと。
- ⑦ 公式ホームページ、X、Facebook 及び YouTube ライブ配信を連動させ、大会の途中経過、写真、公式記録、最終結果、スポンサー及び姉妹クラブとの交流を継続的に発信できたこと。
- ⑧ アンケートを通じ、8チーム開催、開催時期、日程、参加費及び来年度の参加条件に関する具体的な改善方向を得ることができた。

10. 今大会の課題

- ① WCT ポイント付与対象大会として成立させるための8チーム確保：8チーム開催は、WCT ポイント付与対象大会としての成立だけでなく、総当たり戦以外の競技方式を採用し、各チームの試合間隔を改善するためにも重要である。一方、競技方式によっては、一部のチームの試合数が減少する可能性がある。したがって、8チーム確保は最優先課題であるが、参加チーム数の拡大だけでなく、最低試合数と試合間隔の双方を確保する競技方式の設計が必要である。
- ② 開催時期の調整：男子の部と女子の部の開催月を毎年固定するのではなく、5月末から7月までの期間における両部門の開催順を原則として隔年で入れ替える案を含め、他大会との競合を避け、8チームを確保しやすい時期を検討する必要がある。
- ③ 参加チーム数、試合間隔及び試合数のバランス：今回の日程がタイトになった主な要因は、6チーム総当たり戦により、各チームが2日間で5試合を行ったことである。8チーム開催では試合間隔を確保しやすくなる一方、競技方式によってはチームごとの試合数に差が生じる。今後は、予選ブロック、決勝トーナメント、順位決定戦及びコンソレーションゲーム等

を組み合わせ、参加チーム間の競技機会に過度な差が生じない方式を検討する必要がある。

- ④ 参加費負担感への対応：参加費を適正と評価する回答が多数を占めた一方、高いとの回答も6件あった。
- ⑤ ライブ配信体制の安定化：今大会では、配信中に電源喪失、配信停止及びURL変更等が複数回発生した。

11. 来年度以降に向けた対応方針

- ① 女子の部を、来年度以降も継続開催することを基本方針とする。
- ② WCTポイント付与対象大会としての成立及び試合間隔の改善を図るため、8チーム開催を最優先目標とする。
- ③ 8チーム開催時には、予選ブロック、決勝トーナメント、順位決定戦等を組み合わせ、各チームの試合間隔を確保するとともに、可能な限り十分な試合数を保障できる競技方式を検討する。
- ④ 競技方式の決定に当たっては、WCTの要件、各チームの最低試合数、試合間隔、順位決定方法、レセプションとの接続及び大会終了時刻を総合的に検討する。
- ⑤ 8チーム確保に向け、早期募集、候補チームへの個別の働きかけ、出場意思確認及び補欠チーム確保を進める。
- ⑥ 参加チーム数が8チームに達しない場合に備え、6チーム及び7チームで開催する場合の競技方式及び日程案も、あらかじめ整理する。
- ⑦ 男子の部・女子の部の開催月を固定せず、5月末から7月までの期間における両部門の開催順を、原則として隔年で入れ替えることを検討する。ただし、国内外及び地域の大会日程、会場確保、氷の状態、参加見込み等を踏まえ、毎年度柔軟に決定する。
- ⑧ 仕事や学校を休まず参加できる週末開催を基本としつつ、参加チーム数、競技方式、試合間隔、早朝開始及びレセプションとの接続を一体的に検討する。
- ⑨ 6チーム又は7チーム開催となる場合には、金曜夜の試合設定等による日程分散についても検討する。
- ⑩ 6チーム、7チーム及び8チーム開催時の収支をそれぞれ再試算し、参加費負担の軽減可能性を検証する。
- ⑪ 地元企業・商店等からの協賛・支援を拡充し、参加費負担の軽減につなげる。
- ⑫ レセプション及び盛岡らしい交流企画は、本大会の強みとして可能な範囲で継続する。

- ⑬ ビクトリアカーリングクラブとの姉妹クラブ交流及び優勝チームへの海外大会参加機会を、本大会の競技的価値の一つとして明確に示す。

12. 総括

今大会は、ワールドカーリングツアーのポイント付与対象大会としては成立しなかったものの、6チームの参加を得て、5大会ぶりに女子の部を再開し、全15試合を完遂することができた。アンケートは、出場選手26名のうち23名から回答を得て、回答率は88.5%であった。大会全体の満足度については、回答者23名全員が「大変満足」又は「満足」と回答した。会場・氷・競技環境、料理・弁当及びレセプションについても高い評価が得られたことから、競技と交流を組み合わせた現在の大会設計は、女子の部においても一定の支持を得たものと考えられる。一方、試合日程については、試合数は十分であるものの、日程・試合間隔がややタイトであったとの評価も一定数みられた。この結果は、試合数を単純に減らすべきとの結論ではなく、6チーム総当たり戦という今回の競技方式により、各チームが2日間で5試合を行ったことによる影響として捉える必要がある。8チーム開催が実現すれば、WCTポイント付与対象大会として成立する可能性が高まるだけでなく、総当たり戦以外の競技方式を採用することで、各チームの試合間隔に余裕を持たせることが可能となる。一方で、大会方式によっては、一部のチームの試合数が今回より少なくなる可能性がある。したがって、8チーム開催を目指すに当たっては、単に大会規模を拡大するのではなく、次の事項を総合的に検討する必要がある。

- ・ WCTポイント付与対象大会としての成立
- ・ 各チームの最低試合数
- ・ 試合間隔
- ・ 順位決定戦等による競技機会の保障
- ・ 選手の身体的負担
- ・ レセプションとの接続
- ・ 大会終了時刻
- ・ 運営スタッフの負担

8チーム開催を基本目標としつつ、試合間隔と競技機会の双方を確保する競技方式を設計することが、来年度以降の中心的な課題である。また、開催時期については、男子の部を6月、女子の部を7月に固定するのではなく、原則として隔年で開催順を入れ替える案が、参加機会の公平性及び8チーム確保の可能性を高める上で考慮に値する。今後は、参加候補チームへの早期の働きかけ

を行い、開催日程、競技方式、最低試合数、参加費及び WCT ポイント付与の見込みを早期に示す必要がある。

女子の部を再開できたことは、第 10 回大会における大きな成果である。この再開を一過性のものとせず、盛岡市アイスリンクメモリアルカップが、女子カーリング選手にとって、競技力向上、交流、海外大会への挑戦及び盛岡での滞在を含めて参加する価値のある大会として発展していけるよう、今回の成果と課題を来年度以降の大会運営改善につなげていく必要がある。